

不登校経験者へのキャリア教育の可能性 ：ナラティブ・アプローチによる高等専修学校の先駆事例の検討

芸術工芸高等専修学校

横山 優樹

他 1 名

1. 目的と背景

本研究の目的は、不登校経験者に対するキャリア教育の具体的方策について、先駆的な実践事例を通して検討することにある。

中央教育審議会が2011年に取りまとめた「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」によれば、キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義される。そもそもキャリアとは、「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」（キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議，2004）を意味する極めて幅広い概念であり、上記の定義にはキャリア教育がいわゆる進路指導に留まらないことが示唆されている。その背景的な文脈として、経済成長が不透明化し、新卒一括採用や終身雇用に代表される日本型雇用システムが行き詰まりつつあること、またそれに伴い、入学試験・就職試験に備える「出口指導」ばかりではなく、様々な移行機会も含めて生涯に渡る人生設計を支援する必要性が高まっていることが認められよう。さらに、同答申は「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく」ためには幅広い能力を養う必要があるとし、この能力を「基礎的・汎用的能力」と位置付けている。基礎的・汎用的能力とは、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの構成要素に整理される能力であり、その育成は特定の活動や指導方法に限定されず、「様々な教育活動を通して実践される」という。このようなキャリア教育は小学校・中学校・高校と「発達段階に応じて」系統的に積み上げられる必要があるとも考えられ（中央教育審議会，1999）、学習指導要領の中でも一貫してキャリア教育を拡充する必要性が述べられるに至っている。

他方で先行研究は、不登校経験者に対するキャリア教育の不足という問題を浮き彫りにしている。例えば杉田（2012）は、教育センターに通う児童生徒について「小中学校へ登校できていない状況から、キャリア教育を受けることができていない現状がある」と述べ、「不登校回復期」に相当する児童生徒にキャリア教育を施すには、過度の心理的負荷を掛けないような個別的配慮が必要であると論じている。また、小宮（2018）は「小中高を通じて系統的であるべき『キャリア教育』，ポートフォリオ的に積み重ねることによって効果

を發揮する『キャリア形成』に関して、不登校経験を持つ児童生徒は、文字どおりいっそう不利な立場に置かれてしまう」と指摘し、不登校経験者の「キャリア意識の再構築」が課題であると主張している。加えて田中（2022）は、「不登校や中退経験者では無業率と非正規雇用率が高い」、「不登校経験者は就学や就業といった進路形成のキャリアの問題を抱えている」といった統計的事実を挙げ、不登校経験者の高校中退や無業を予防するようなキャリア支援の必要性を訴えている。他にも、不登校経験者は進路意識が低いこと（田山，2008）や進路決定スキルが低いこと（五十嵐，2011）も報告されており、進路選択の幅やモデルが少ない傾向にあるとの調査結果も認められる（松井・笠井，2013）。さらに、佐藤・米光（2018）は不登校経験者の大学進学後の不適応に着目し、不登校経験者に対しては「単に大学進学へ導くのではなく、大学への適応やその後の適応的なキャリア形成を考慮した進路選択への援助が重要である」とも論じている。不登校支援の最終目標は、再登校・教室復帰よりもむしろ「社会的自立」に置かれるべきであるとの文部科学省の見解も、まさにこのような文脈で捉えることができる（浜内，2023）。

以上の言説を踏まえると、不登校経験者にこそ手厚いキャリア教育が必要であり、不登校による系統的キャリア教育の中断や欠如を踏まえた支援の配慮・工夫が求められていると考えられる。ところが、不登校経験者へのキャリア教育の具体的な手立てに関しては未だ研究が少なく、事例の報告も乏しい。不登校者数が年々増加する一方で（文部科学省，2023），調査が十分に追いついていない現状が伺われるのである。

そこで本研究では、不登校経験者へのキャリア教育について、事例の検討を行う。具体的には、学校から実社会への移行を目前に控える後期中等教育段階に焦点化し、先駆的な教育支援に取り組んでいる学校の教職員に対して、「不登校経験者が将来的に自立するためにはどのようなキャリア教育が必要なのか」という観点からインタビュー調査を実施する。その調査結果に基づき、不登校経験者へのキャリア教育に関する工夫や考え方、配慮すべき点等を整理し、今後の方策について考察することが、本研究の目的である。

2. 方法

2-1. 調査対象

本研究では、不登校経験者へのキャリア教育を多年に渡り実践している学校として、3つの高等専修学校を取り上げる。

高等専修学校とは、中学卒業者を主な対象とした「非主流の後期中等教育機関」（伊藤，2017）の一つであり、商業や衛生といった各分野の専門的技能の習得を目指したカリキュラムが展開されている。修業年数は（準看護学校を除いて）3年制が一般的であり、今回の調査対象校もすべて3年制である。また、不登校経験者の進学先となることが多い通信制高校や定時制高校と異なり、高等専修学校は普通科の公立高校と同じように時間割に沿って授業に出席し、一定の登校日数・出席時数に達することが進級・卒業の要件となる。

その意味で、高等専修学校は「固いスタイルの学校」(山田, 2022) であると言える。

加えて、多くの高等専修学校は専門科目の学習成果を通信制高校の履修と見なす「技能連携制度」を利用し、通信制高校との同時入学の体制を採っている。これにより、生徒は高等専修学校に在籍すると同時に通信制高校の単位も取得できる。かつ、高等専修学校にて不登校が再発し、退学等の進路変更を余儀なくされた場合にも、同時入学をしている通信制高校での学習を継続することで高卒資格の取得が可能となる。尚、今回の調査対象となった3校の内、2校がこの技能連携制度を取り入れていた。

また、文部科学省はこうした高等専修学校を「不登校や中退を経験した生徒のためのセーフティネット」(文部科学省, 2018) とも形容し、不登校経験者の受け入れ先として位置付けている。実際、令和5年度のアンケート調査によれば、全国の高等専修学校の在籍生に占める不登校経験者の割合は20.7%に上るといふ(大岡学園高等専修学校, 2024)。それゆえ、高等専修学校には不登校経験者へのキャリア教育に関する実践的な知見が蓄積されていると考えられる。

尤も、これまで高等専修学校という学校種は、キャリア教育の文脈ではほとんど論究されてこなかった。というのも、同学校種は「特定分野でのスペシャリストを養成する」という側面が強く、より幅広い視点を持つキャリア形成やキャリア発達とはやや縁遠いとも捉えられるからである。例えば瀧本(2022)は、専門学校が「入職後にすぐに役立つ『即戦力』人材を育成する職業訓練機関」として認識され、その反面「キャリア教育の主たる対象とはみなされてこなかった」と論じている。森谷(2023)も、「職業に直結した専門科目を学ぶ専門高校においては、職業教育が実施されており、敢えてキャリア教育を行う必要性については声高には叫ばれてこなかった」と指摘している。こうした専門学校・専門高校を巡る状況は、専門学校(専修学校)の高等課程と言うべき高等専修学校にも同様に当てはまるであろう。

しかしながら、高等専修学校も学科が多岐に渡っており、中には必ずしも職業訓練に特化せず、社会での自立に向けて個に応じた様々な支援を行っている学校が存在する。確かに、調理師科や美容師科といった国家資格の取得を目指す学科は、厳密なカリキュラムの施行が求められ、それに応じて職業訓練校としての色合いが濃くなる。反面、国家資格の取得を第一義的な目的としていなかったり、資格取得のハードルが比較的低かったりする学科では、むしろ不登校経験を積極的に受け入れ、インクルーシブな教育環境を実現している場合が少なくないのである。

今回、そうした学校の中から縁故法にて3校に調査研究への協力を仰いだところ、承諾を得られた。学校法人豊野学園豊野高等専修学校(長野県)、学校法人岡崎学園東朋高等専修学校(大阪府)、学校法人郡山学院高等専修学校(福島県)の3校である。いずれの学校も不登校経験を積極的に受け入れると同時に、全国的に見て先駆的かつユニークな支援に取り組んでおり、そのノウハウには学ぶべき事柄が多く含まれていると考えられる。

2-2. 調査方法

本研究では、半構造化面接でのインタビュー調査を行った。実施時期は2024年6月～7月、時間は1時間半程度、回数は1回とした。インタビュー어의条件としては、勤務年数・雇用形態・役職等は問わず、不登校経験のある生徒へのキャリア教育に携わっている現職の教職員とし、インタビュー어は臨床心理士・社会福祉士資格を持つ横山が務めた。

面接はインタビュー어의許可の下、ICレコーダーにて録音した。面接の冒頭にて、「不登校経験者が将来的に自立するためには、どのようなキャリア教育が求められるのか」という本調査のリサーチクエスチョンを伝え、その後は表1にあるような質問を適宜投げ掛ける他、インタビュー어의自発的な語りを中心に、できるだけ自由な形でインタビューを進めた。

表1 質問項目

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・御校のカリキュラムにおけるキャリア教育の位置づけを大まかにお教え下さい。・特に力を入れておられるキャリア教育があれば、お教え下さい。・キャリア教育に用いられている教材があれば、お教え下さい。・将来的な自立を考える時、不登校経験者に特に必要なキャリア教育とは、どのようなものであると思われますか。・不登校経験者へのキャリア教育において、御校で大切にされている考え方やポイントがあれば、お教え下さい。・卒業後に向けて、御校在学中に不登校経験者に身に付けてほしい能力としては、どのようなものが考えられますか。・不登校経験者へのキャリア教育に関して、指導・支援上の具体的な工夫や配慮があれば、お教え下さい。 |
|--|

2-3. 倫理的配慮

インタビュー어には研究目的とプライバシー保護に関する説明を書面にて行い、調査への協力はいつでも自由に取り止められること、逐語記録から個人情報（氏名・住所・電話番号・年齢・性別・その他の固有名詞）を削除すること、情報の管理を徹底すること等を伝え、同意を得た。また、学校名や学校の基本情報に関しては、掲載を許可して頂くと同時に、インタビュー어의氏名はすべて仮名を用いた。

2-4. 分析方法

本研究では、インタビュー調査の実施と得られたデータの分析に際して、ナラティブ・アプローチを理論的枠組みとした。

ナラティブ・アプローチとは、ナラティブという言語行為ないし物語に着目し、語り手の個人的な経験を重視する研究方法である。二宮（2010）はこのナラティブ・アプローチについて、Clandinin & Connelly が提唱する「Narrative Inquiry（ナラティブ探究）」に依拠しつつ、以下のように説明している——通常の方法では、普遍的な理論（セオリー）の確立が目指されるため、「個人の経験を扱っていても、研究プロセスのなかで、その個人の経験にまつわる固有の意味は削ぎ落さざるを得なかった」。しかし、教育実践に関する研究ではむしろ、「現場の人々の経験とその文脈」に基づき、「実践に対する理解を広げ、深める」ことこそ有用である。ナラティブ・アプローチは、そうした現場への貢献を重視し、理論的因果関係やセオリーの抽出を目指すのではなく、文脈や「語られ方」を含めて人々のナラティブをそのままに捉えようとする姿勢である。

また、東海林（2018）はナラティブ・アプローチを「個人的実践知（personal practical Knowledge）」を見出すための方法論として位置づけ、その実践知を「場合によっては些末に見えるものであるが、同じような立場にある者にとっては、より具体的で力強い知になりうる」と指摘している。

このように、ナラティブ・アプローチは現場の人々の経験を中心に置き、その固有の意味や実践知を掘り上げることを目指す方法論であり、教育現場での個別具体的な支援の在り方を検討しようとする本研究の目的に合致するものと思われる。

3. 事例

本節では、3つの高等専修学校を事例として取り上げ、それぞれのインタビュー調査の内容を整理する。尚、インタビューイの語りをそのまま引用する場合には、本文を1行空け、一段下げて、斜体にて表記する。

3-1. 事例① 豊野高等専修学校（長野県）

3-1-1. 学校の基本情報及び調査実施の概要

学校法人豊野学園豊野高等専修（以下、豊野と略記）は長野県下で唯一の高等専修学校であり、飯山線豊野駅から徒歩3分程度の住宅街に位置している。校舎は杉木材が使用された2階建てのログハウス建築であり、教室や職員室を含め、ほとんどの部屋の床と壁が温もりのある褐色の木目で統一されている。筆者が調査に訪れた際に印象的であったのは、玄関先に立つと、仄かな杉の香りが漂ってきたことである。また、吹き抜けのテラスにも苗木やプランター栽培が並び、渡り廊下にも木材の長



図1 豊野高等専修学校校舎①

椅子が配置されており，風通しの良い開放的な空間が演出されているように感じられた。

課程としては高等課程と専門課程，及び通信制課程（「さくら国際高等学校」の長野キャンパス）があり，今回の調査対象となる高等課程は生活服飾コース，生活情報コース，生活美術コース，生活介護コースの4つの学科で編成されている。また，A組とB組という二種類の学習スタイルが用意されているのも豊野の特長である。A組は，朝から登校して決められた時間割に沿って授業を受けるという全日制のスタイルであり，他方でB組は登校時間が決められておらず，一斉授業よりも個別のレポート学習が中心となる。入学後，どうしてもA組では登校が難しいという時，B組に移り，一定程度登校しつつ高卒資格取得を目指すことができる。その意味で，B組は通信制と全日制の中間的な選択肢と言える。

学校規模としては各学年の募集定員が50名程度，その内A組は40名程度，B組が10名程度である。B組は一つであるが，A組は学年によって2～3クラス編成されているため，



図2 豊野高等専修学校校舎②

各クラスの生徒数は多くても20名程度となっている。また，その内で不登校経験者の割合は5割をやや上回るという。

今回のインタビュー調査は，2024年6月25日に実施した。インタビューイーは，管理職であり保健体育担当の井上先生，2学年担任の菱沼先生，「相談員」のコーディネーター役を務める望月先生の3名である。

3-1-2. 井上先生・菱沼先生・望月先生の語り

不登校経験者の受け入れ体制

豊野の不登校経験者に対する支援は，当該生徒が入学する以前から始まる。井上先生によれば，不登校経験者にとっては入学直後の4月こそ，その後の適応状況を大きく左右する分岐点となるため，中学校からの引継ぎを入念に行うことが必要となる。豊野では，その引継ぎを「支援会議」と呼び，2～3月に実施している。具体的には，中学校の担任に「支援基礎票」を作成・持参してもらい，それを基に当該生徒に係る教職員が集い，対面での会議が行われる。支援基礎票の記載項目は，家庭の養育状況から服薬・診断の有無等，多岐に渡るが，井上先生によれば特に「プラスの面」の情報が重要であるという。

井上先生：例えば今年は51名入ってきましたけれども，51人，一人一人，どういう特性を持っていて，どういうところが得意で，どういうところが苦手で，なぜ不登校になっちゃったのか，または中学校でこういうことを頑張りましたとか，そういったものを，一人一人の支援会議で引継ぎをする。特に一番ここ（支援基礎票の「得意な

こと」の欄) , 負の部分よりもプラスの面を知っていた方が、最初の会話の取っ掛かりになる。推しは誰かとか、どのゲームが好きかとか。

また、入学前からの支援として、豊野では「学習相談」を実施している。この学習相談では、国語・数学・英語といった一般教科の習熟度のアセスメントと共に、入学後の学習に向け、複数回の相談を通して学習のサポートも行われる。例えば数学科では、この段階で得られた習熟度の情報をクラス分けにも活かしていくという。

加えて、豊野では相談体制の充実化により、不登校経験者の学校生活の定着が図られている。すなわち、スクールカウンセラーやケースワーカーといった外部の専門職のみならず、常勤職員の中でも「相談員」の役割を担う教員が2~3名おり、常時生徒からの相談に応じられる体制が取られているのである。

「いろんな人に出会う」経験

さて、不登校経験者の将来的自立に向けた支援としては、どのような取り組みが見られるのであろうか。菱沼先生によれば、将来的自立のためにはコミュニケーション力の向上が不可欠であり、そのためには在学中、「いろんな人に出会う」経験が求められるという。

菱沼先生：授業では、いろんな人に出会うというのが、もう絶対に必須だと思っています。例えば介護の授業では、本当に外部からいろんな人を呼んで、授業の中で出会う。今年はユニバーサルツーリズムと言って、障害を持っていたり、あと高齢者ですね、そうした人たちが外に出るのをサポートするっていう、そのお仕事をされている方を呼んで、どういうモチベーションで、どういう研修を受けてされているのか、話してもらおうと思っています。

井上先生によれば、総合の時間でも企業関係者を講師に呼ぶことが少なくないという。具体的には、学校として講演依頼を仲介する会社と提携し、講師リストを用意しており、担当が様々な業界からゲストスピーカーを招くことができる体制が取られている。このような取り組みは、生徒が外部に触れる機会を増やすことで、学校生活から実社会へのスムーズな移行を促す試みであると言える。

さらに、豊野では有志のボランティア活動を通して「地域に出ていく」ことも推奨されている。

望月先生：ボランティアで地域に出ていこうというのを生徒に募集しますが、なかなかね、自分からは難しいですけど、先生に「行こう」って言われると、「行ってもいいかな」ってなる。

井上先生：で、行ったらすごいですよ。「ここまでやるの」っていう。積極的にコミュニケーションを取ったり、普段の生徒からは予想できないような動きをする。意外性を発見できることが結構あります。

菱沼先生：やっぱり、同じ学年とかより、全く知らない人の環境の方ができたりすることってあるじゃないですか。そういう、身内じゃない人たちからの称賛の声っていうのは、生徒達にすごく響くんですよ。地域のおじちゃん、おばちゃんから「ありがとう」って言ってもらったりするとね。

さらに菱沼先生は、グループでの「話し合い」も不登校経験者に必要な経験であると語る。

菱沼先生：特に3年生ですけど、話し合いの経験が必須だと思っていて、自分が苦手な相手だってもちろんいるけど、そういう人の意見も聞く。で、リーダーを一人、5人くらいの中で決めるんですけど、別にリーダーの役割が細かく決まっているわけじゃなくて、ただ全員が意見を出せるようにしてねっていう。で、必ずみんなにリーダーをしてもらって、そのリーダーが、誰か話していない人がいたら「話してね」って声をかける。

同じく、人前での「発表」の機会を設けることも、豊野が意図的に取り組んでいることである。

望月先生：昼休みにミニダンス発表会っていうのがあって、一人でも発表していますね。

菱沼先生：意外ですけど、不登校の子でもそういう発表の場があったら出たいって思っている子が結構いるんです。機会があれば、背中を押してもらえればと思っている。

井上先生：だから体験入学とかね、中学生が来るじゃないですか。そうすると、教員が生徒にインタビューするかたちで、中学生に話してもらうんですよ。「入学してどう？」とか、「入学してよかったことは？」とか。で、それもね、結構しゃべるんです、意外とね。「自分は中学校時代、不登校でした」とか、「勉強大っ嫌いで、全然自分に自信がなかったです」とか、そういう話をしっかりしてくれるんですよ。

ソーシャルスキルの授業と「ロードマップ」

一方、カリキュラムに目を向けると、豊野では1年次に「SST」、2年次に「マナー」、3年次に「ガイダンス」という授業がそれぞれ行われており、いずれもキャリア教育に関連した内容となっている。例えば「SST」は、学外の講師が「箸の持ち方」や「割りばしの割り方」に至るまで、事細かにソーシャルスキルを伝えていく授業である。菱沼先生は「マナー」を担当し、「挨拶の仕方」や「電話の取り方」等を学ぶ授業を展開している。

菱沼先生：2年生は「マナー」という授業があって、コミュニケーション検定という検定を受けさせるための授業をやっているんですけど、それって何かと言ったら、社会の全般いろいろですね、挨拶の仕方であったりとか、電話の取り方であったりとか、自分で名刺を作らせて、それをいろんな人に渡したりとか。

そして3年次の「ガイダンス」では、求人票の見方や履歴書の書き方等、具体的な就職活動の指導が行われる。また、3年生は「進路実現の手引き」という小冊子を用いた進路情報の整理や、アプリを通じた自己理解の深化にも取り組むという。

菱沼先生：進路実現の手引きっていう、段階的に書いていくと自己理解が深まるっていう教材があって。3年生で今取り組んでいるのは、その一つの入口として、アプリのMBTI（オンライン上の性格診断テスト）、ああいうのどっつきやすいじゃないですか。不登校の子たちって、自分の強みだとか、自分の達成できたこと、そういうポジティブなことを書けないんですよ。で、ああいうのを使って、リフレーミングさせて、短所が長所にもなるっていう。その作業をもう、3時間かけてやっています。

加えて、キャリア教育向けの教材として「なりたい自分をめざすロードマップ」というものが挙げられる。これは、「自己成長を感じにくい」「自己肯定感や自己有用感が低い」生徒のための自己評価のツールである。一般的にはキャリアパス等が用いられるが、不登校等により学校生活・社会生活の経験が乏しい生徒には表現しづらい部分があるということで、豊野では生徒が「自分を飾ることなく」自由に表現でき、かつ自らの成長や実績を視覚的に捉えられるようにと、趣向を凝らして独自の教材を開発したのである。

井上先生：「なりたい自分を目指すためのロードマップ」というのを作って、行事のふり返りだとか、将来の進路の関係を記録していく。何月何日に漢字検定を何点取ったとか、情報の検定を取ったとか、そういった記録ができるものを作って、ファイルを用意してファイリングしていく。まあ、自分の足跡というか、学習の積み重ねがあったということが自分でも分かるようになっていて、そこに先生からのアドバイスや、友だちからのアドバイスが入ってきて、それを1冊持っている。それが自分の3年間の、なりたい自分に向けた軌跡になる。

実習先・就職先に関する配慮

「実習」の充実化も、豊野のキャリア教育の一環として挙げられる。菱沼先生が担当する生活介護コースでは、2年生の段階から介護の現場での実習が始まる。とはいえ、不登校経験者の中にはコミュニケーションの苦手さばかりではなく、様々な発達特性を持つ生

徒も多く、そうした生徒の実習先での受け入れを巡っては「失敗」もあったという。

菱沼先生：やっぱり、実習先に受け入れてもらうために何回も足を運んで、「こういう生徒です」というのを伝えていこうとしているんですけど、失敗したこともありました。「この子はちょっと…」とか言われたりして。でも、なるべく最初に行って、「こういう子なんです」ということを伝えていって、今のところはなんとか受け入れてもらっているかなと思っているんですけどね。

井上先生も、生徒と職場の「相互理解」を深めることこそ、就職先での定着において重要であると指摘する。

井上先生：やっぱりね、離職が早まっちゃうのはなんでかと言うと、事前にどういう生徒なのか、または生徒達にとっても、そこがどういう会社なのか、そういう相互理解が、数日のインターンシップではなかなか難しいと思うんですよね。やっぱりそれなりの長さ行かないと。私が担任をして卒業させた生徒の中にも、4週間とか5週間行かせた子がいます。

菱沼先生：なので、今年はとにかく実習にいっぱい行かせようと。公欠で行ってもらって、早いうちから社会と繋がってもらってというのを考えています。

「揉まれる」ことの意義

以上のように豊野では、不登校経験者に授業・実習を通して実社会と接触させたり、自分の成長を視覚的に捉えられる教材を用いたりし、将来の自立に備えた教育支援が行われていた。井上先生からはインタビュー終盤にて、不登校経験者が全日制の学校に通学することの意義について語られた。

井上先生:通信制はまあ、時間も自由だし、そんなに縛られないし、いいんだけど、やっぱり心のどこかで、みんなで授業を受けて、みんなと一緒に活動したい、生徒会をやってみたい、中学校でできなかったから、いろんな集団の活動をしたい、そういった生徒さんは多いですよ。あと通信制では、卒業した後、じゃあ就労できるか、定着できるかどうかというね。そこはやはり、集団の中で揉まれてなければ、ちょっと厳しいんじゃないかなと。だから確かに、フリースクールだとか、いろんな学びの場があるんだと思うんですけど、私はやっぱり学校だと。学校に来て、先生方と出会う、生徒同士で活動する、学ぶ、遊ぶ。そのことが生徒たちにとって、きっと自立に繋がっていくのではないかと信じています。

3-2. 事例② 東朋高等専修学校（大阪府）

3-2-1. 学校の基本情報及び調査実施の概要

大阪市天王寺区に位置する学校法人岡崎学園東朋高等専修学校（以下、東朋と略記）は、近鉄大阪上本町駅や大阪メトロ谷町九丁目駅を最寄りとし、校舎は5階建てのビル建築である。立地としては基本的にオフィス街であるが、大通りからやや離れ、近辺にはマンションや寺院、公園等も共存しており、都心部の喧騒を感じさせない落ち着いた環境となっている。筆者が校舎見学をした際に特に印象に残ったのは、廊下に貼り出された行事写真の数々である。端々に先生方の情味や人間味が滲み出て、アットホームな雰囲気でありながら、学校全体に活気や熱気が漲っているように感じられた。



図3 東朋高等専修学校校舎①

東朋の学科は、普通科と総合教育学科の2つである。普通科は1クラス30名程度で3クラス編成となっており、「トータルビューティー」や「モータービジネス」といった様々なコースを選択できる。他方、総合教育学科は1クラス10名程度で9クラス編成であり、基礎学力や社会性の向上のための特別支援教育が行われている。また、「エンジョイコース」という授業が両学科に共通して設けられているのも、東朋の特色である。このエンジョイコースでは、「模型づくり」「まち歩き」「めっちゃ！マイクラ」といった20コース以上もある選択制の授業が展開されており、いずれの授業も学年混合の縦割りクラスとなっている。加えて、総合教育学科には高等専修コースと高卒資格コースの2コースがあり、前者では個々の学力に合わせた習熟度別や進路希望別の授業が、後者では高卒資格取得のための授業が、それぞれ少人数制で行われている。かつ、いずれのコースにも「イラスト&アート」「クッキーづくり」「アイロンビーズ」等といった多様な選択授業が認められる。尚、在校生に占める不登校経験者の割合は普通科が4割、総合教育学科が2割であるという。

また、東朋の技能連携は学園内の通信制課程である東朋学園高等学校と締結されている。学園グループでは大阪自動車整備専門学校、就労移行支援事業所リアルタ、自立訓練事業所カムデイ、放課後等デイサービスフォレストといった事業も運営されており、高等専修学校の在籍生や卒業生の受け入れ先の一つになっている。

今回のインタビュー調査は、2024年7月6日に実施した。インタビューイは、総合教育学科の教頭をされている安藤先生である。



図4 東朋高等専修学校校舎②

3-2-2. 安藤先生の語り

多彩な授業の意義

東朋のカリキュラムの特色は上述したように、学科・コース・学年を跨いで編成される多彩な選択授業にある。例えば普通科・総合教育学科の全学年合同の科目であるエンジョイコースの種類は、「屋外スポーツ」「映画研究」「アナログゲーム」「筋力トレーニング」「ジグソーパズル」「手作り小物」「ネイルを楽しもう」等、20以上にも及んでいる。また、総合教育学科のみで行われる「ものづくり実習」も、「レザークラフト」「陶芸」「さをり織り」等、10種類を超える。さらには「総合的な探求の時間」や「グループワーク」の授業でも、そのクラスの担任や生徒が主体となり、授業で取り組む内容を独自に決めることができる。

安藤先生：総合教育学科の「グループワーク」の授業は結構面白いですよ、みんなバラバラなことをしてるから。このグループ、めっちゃ公園出かけるやん、とか、このグループ、ドミノ協会から仕入れて、めっちゃドミノやってる、とか。あと、普通科の総合的な探求の時間は待機集中の選択授業にしているので、調理好きな先生だと、インスタント食品の美味しい食べ方を追求してみたり、鉄道関係の人もいるし、水泳の四泳法をマスターしようとか、ジブリ映画を深掘りしようとか、冬なんか、おせちを作っているクラスもあったりして。

安藤先生によれば、選択制の授業を幅広く展開することで、生徒は自分の好きなもの・得意なものに取り組むことができ、自信が育まれる。かつ、「グループワーク」の授業等を通してホームルーム以外の縦割りクラスに所属することにより、人間関係が広がり、コミュニケーション力も鍛えられるという。

安藤先生：(グループワークの授業は)好きな子は好きだし、なかなか馴染めない子ももちろんいるけれど、でも社会に出たらそんなもんやでっていう。いろんな人と付き合っ
て、その中でどう振舞っていけばいいとか、どう話をしたら盛り上がるとか、こういう質問をしたらどうかとか、知識を身に付けるというよりは、人間関係を経験する方が目的かなと思うので。自分の意見を言うのも大事だけど、言いすぎるのもよくないし、人の話を聞いて、譲るところは譲らないといけないし。この先、友達ばかりの社会で生きていくわけではないので、先輩とか後輩っていう関わりが求められたりする中でも、踏ん張ってくれたらいいなと思うし。

他方、数学や英語といった教科に関しては、学園内の通信課程との技能連携によるレポート学習にも取り組む。とはいえ、不登校経験者の中には勉強が苦手な生徒が多く、一般

的な通信制高校のレポートでは目に見える成果が上がりにくい。そこで東朋では、生徒の学力に応じたレポートと考査を独自に作成し、勉強においても「できる・できたの感覚」を養うことに重きを置いている。

安藤先生：レポートはすごくゆったり、噛み砕いて作って頂いているので。普通科は5教科、全部ベーシックです。小・中学校に行けていない子のために、学び直しも含めて、復習がてらやって、できない感覚から、できた・できる感覚を高めてあげて、少しずつ自信を付けて、育てて、それから進路どうするっていう方向に、順次持っていきたいので。

また、総合教育学科では「生活力を身につけるための授業」として、調理実習がどの学年の時間割にも組み込まれている。普通科にも「フードクリエイト」というコースがあり、エンジョイコースにも調理関係の授業があるため、「食」に重きが置かれていることが伺われる。安藤先生によれば、調理実習は生活力に直結するのみならず、コミュニケーションや集団行動の練習にも繋がるという。

安藤先生：たとえ勉強ができて、それだけで生活していくことはできないから。毎週調理実習をするのも、食べないと生きていないよっていう(笑)。みんなで作って食べると、それ自体がコミュニケーションにもなるし、調理の効率を考えたり、役割分担を考えたりすることも大事で、実際1年生と3年生を比べたら、調理の動き方が全然違う。だんだんと自分たちで動けるようになっていくので。

「転んだ時の立ち上がり方」と「相談するスキル」

安藤先生はまた、不登校経験者が「失敗する経験」を持つことの大切さを強調した。

安藤先生：不登校や発達症などの支援を必要とする子に共通して言えるのは、やる前から、できないとか、苦手だとか、割と食わず嫌いな感覚の子が多い。なので、今のうちにいっぱい挑戦して、できたらできたで達成感を得られるからいいんだけど、失敗の経験の方が、失敗したときにどう対処するかの方が大事だなと思ったりするので。その意味では、転んだ時の立ち上がり方を勉強してほしいですね。そういう立ち上がる経験なしに、ぼんって就職決まっちゃって、社会に出ちゃってから壁にぶつかって、もう立てないっていうパターンにはなってほしくないと思うので。今のうちにどんどん失敗して、怒られるなら怒られて。うちは、生活指導もしっかり目にやる学校なんですけど、指導とか怒られるっていうと、みんな敬遠するかもしれないけれど、それこそ成長できるチャンスやでっていうので、チャレンジして、失敗して、修正して、そ

のサイクルで成長して行ってほしいなと思いますね。

同時に、「相談するスキル」が重要ということも、卒業生のエピソードを交えて語られた。

安藤先生：最近はどんどん転職という流れもあるのかもしれないけれど、やっぱり不登校とか発達の子は、見通しが立たないときついし、調子の波もあるので、やっぱり自分に合った職場で定着してほしいなと。そうすると、うちに在学している間に、困った時に相談できるスキルを身に付けてほしいと思いますね。困りごとを出せるかっていう。この前も卒業した子で、職場で相談できないで、電話を掛けてきた子がいましたけど。「人間関係で気になることがあって」って。元担任と進路（主任）とで、どう進めるか話し合っ、「最悪辞めるとか言うてんねんけど〜」とか言いながら、誰にどう相談するかとか、その子と一緒に作戦を練って…っていうのをやっていたら、「上手く行きました、まだ（今の職場を）続けます！」となって、こちらも「良かった〜」って。

3年間かけての進路決定

他方、カリキュラムにおけるキャリア教育（進路指導）としては、入学直後の4月に早くも進路の方向性を問う面談があり、職場体験や会社見学も1年次に組み込まれている。2年次にはビジネスマナー関連の授業があり、3年次にはより実地的なロールプレイや面接練習が行われる。安藤先生によれば、進路選択は3年次に行うというより、「3年間かけて」行うものであるという。

安藤先生：入学したらいきなり、4月の面談で進路の方向性を訊いています。まだ全然決まっていなくてもいいけど、3年間かけて取り組んでいくのは、自分だからって話をして。「まだ早い早い、そんな先のこと考えられへん」っていう人もいますけど、1年生の間にいろんな実習に行っ、何が合っているのか、どういう環境だと馴染みやすいのか、色々探して、実際に行っ、試してもらいますね。

また、安藤先生は「基本の身の回りのこと」を身に付けていくことこそが進路決定に繋がると考え、保護者に入学前からその旨を伝えているという。

安藤先生：中学生の保護者さんで受験される時に、進路決定に向けて何か特別なことをやるというよりは、日々の生活の中で、挨拶ができるとか、お礼が言えるとか、謝罪ができるとか、ハウレンソウができるとか、そういう身の回りの一個一個が整っていくことが、進路決定に向けての一步一步なんですよってという話をして。だから、学校だけでできることじゃなくて、ご家庭と一緒に連携して、一緒にやりましょうねってい

うのは、必ず申し上げることですね。仕事の中身とか、働いた後に覚えなきゃいけないことはいっぱいあるかもしれないけれど、どこに行っても基本の身の回りのことができることが大前提になってくるから、そこを伸ばしましょうと。これは、3年間かけてだから、3年生になってからじゃ手遅れですよ、今から進路決定に向けて、少しずつできるようになって、いい段階で3年生を迎えましょうねって、絶対に申し上げることですね。

とはいえ、安藤先生によれば、不登校経験者の中には3年間では就労準備期間として十分ではなく、より時間を掛けて成長してほしいと思うような生徒もいるという。

安藤先生：やっぱり不登校の子とか、学校に通うという習慣が3年間でせつかく身に付いて、生活も安定してきて、そのタイミングで卒業していきなり途切れてしまうのは、つらいよねっていう。やっぱり、吸収するスピードがゆっくりな子たち、不登校の子でスローな生活を送ってきて、まだ吸収しきれていなくて、もうちょっと時間を掛けた方がいいんじゃないかっていう、本人的にも保護者さんのにも、送り出す側としても「まだ早いよね」「もうちょっと時間ほしいよね」っていう層は、やっぱりありますよね。人間関係のいろいろ、ようやく先生としゃべれるようになったとか、自分の意見を言えるようになったとか、徐々にできてきて、「卒業が今か～」という、もったいない時があります。

ちなみに、東朋の卒業生は、グループ内の就労移行支援事業所を利用することもある。それにより、高等専修学校での3年間に加え、2年間を就労準備に当てられ、5年間かけてゆっくりと進路決定に臨むことができるようになるという。

「胸を張って」もらうための「仕掛け」

以上で見てきたように、東朋では非常に多彩で自由度の高いカリキュラムを通して、多様な人間関係の構築や着実な生活力の養成に取り組まれていた。最後に安藤先生は、そうした東朋独自のカリキュラムに込められた意図について語った。

安藤先生：支援の要る子も、不登校の子も、発達障害の子も含めて、自信を持って堂々として生きていってほしいなと思います。自信をどう持たせてあげられるかが課題で、「自分たちは隅っこでええねん」では、もったいないよと。遠慮しなくてええやんと。何かを堂々と披露できたり、胸を張って人前に立てたり、そういう仕掛けをどんどんやりたいなって思いますね。勉強がすべてではないと思うので、これが好き・これが得意というのを、胸を張って言える、そのきっかけ作りですね。

3-3. 事例③ 郡山学院高等専修学校（福島県）

3-3-1. 学校の基本情報及び調査実施の概要



図5 郡山学院高等専修学校校舎①

郡山学院高等専修学校（以下、郡山学院）の所在地は福島県郡山市、郡山駅より徒歩10分程の市街地である。旧校舎が福島県沖地震にて半壊状態に陥ったため、2022年12月に新校舎に建て替えられ、翌年4月より運用が開始された。新校舎は桜色一色の外壁が鮮やかであり、遠目にも存在感のある建物となっている。

周辺環境としては、国道から細い坂道に折れて緩やかな傾斜を登り、住宅街に差し掛かる辺りであり、駅からのアクセスの良さにも関わらず静かで落ち着いた空気が漂っている。設備としては広々とした談話スペースや、新刊がブックスタンドに並ぶ図書室が特徴的であり、さらに生徒が休憩・交流できるよう、椅子やロビーチェアが様々な場所に配置されている。筆者が調査に訪れた2024年7月時点で、新校舎は竣工後1年半を経たばかりであり、白を基調とした明るく清潔感のある内装が印象的であった。

郡山学院の学科は情報事務科であり、1学年60名定員、いずれの学年も2クラス編成である。カリキュラムの特色としては、資格取得の多さが挙げられる。簿記を始め、全国経理教育協会の様々な資格を在学中に取得でき、その種類数は3年間で一人平均6.9個にも及ぶという。加えて、郡山学院は“変身できる学校®”というコンセプトの下、不登校経験者を積極的に受け入れ、学び直しや社会性の養成にも力を入れている。この方針は学校案内等でも明文化されており、特に“変身”の二文字は同校を象徴する惹句として多用されている。具体的には、1年生全員にスクリーニング的にカウンセリングを受けさせたり、登校を奨励するために毎月「月間皆勤賞」を授与していたりする等、不登校経験者が全日制に適応するための様々なサポートが行われている。

尚、同校では資格取得の授業時間を十分に確保するため、通信制高校との技能連携は取られていない。また、在籍生に占める不登校経験者の割合は令和6年度、29.6%である。

今回のインタビュー調査は、2024年7月16日に実施した。インタビューイーは国語科担当の緒方先生、管理職の大橋先生の2名である。



図6 郡山学院高等専修学校校舎②

3-3-2. 緒方先生・大橋先生の語り

インクルーシブな環境の整備

郡山学院では、不登校経験者や特別支援学級の出身者が同じクラスに混在しており、インクルーシブな教育環境が実現されている。緒方先生はまず、そのことが不登校経験者にとって持つ意義について言及した。

緒方先生：不登校の子、学力不振の子、障害のある子が混ざっているんですけど、半年ぐらい経つとまぎれますね。別に障害が気になんないなとなったり、他の生徒とあんまり変わらないなとなりまして。特にこちらが意識したわけではないんですけど、不登校だった子が、支援学級にいた子とその辺の駐輪場で一緒にゲームをやって、それで仲良くなって休まなくなったり。私が担任をしていた時には、不登校の子と、ちょっと元気のよい生徒何人かで、掃除をやるから手伝えと。で、一緒に汗を流して、そうするとトークもしますんで、自然に関わりができて、友達になった、ということで休まなくなる。

また、休み時間にカウンセリング室や保健室を開放し、一人で過ごしたい生徒が利用できるようにする等、環境整備も行われている。上述した1年生全員へのカウンセリングの実施や月間皆勤賞等も、不登校経験者が全日制に適應するための支援と言える。

資格取得に特化したカリキュラム

とはいえ、郡山学院において最も特筆すべき支援は、資格取得を巡るものであろう。在学中に取得できる資格の種類は10前後もあり、資格試験に合格した際に授与される賞状の枚数は、3年間で一人平均10枚にもなるという。こうした資格取得は言うまでもなく、履歴書に記載でき、種類によっては就職にも直結するものであるが、同時に郡山学院では、検定試験が生徒の自信や自己肯定感を高める契機になるよう様々な工夫が凝らされている。

緒方先生：検定試験をたくさん取らせる学校なんですけれども、4級とか3級とか、低い資格から取れますと。で、合格したらみんなの前で表彰して、賞状を持ち帰ったらば、額を買って下さいということで、安い額でいいんで、お茶の前に飾っておいてください、そしたら、その額があることで、いつも褒められている気持ちになったり、もっと高い資格を目指そうという気持ちになったり。たまに家庭訪問に行くと（賞状が）飾ってあって、そのカラーコピーがおばあちゃんちにも掛かっているという…できるだけ褒める材料というか、それが見て分かるようにということですね。あと、検定試験が終わると、1週間後にホームページで発表されて、校舎の各階にも、誰が受かったか合

格発表を貼りだして、みんなでワーワーと。そういうふうにして結果が出ると、目に見えて、本人にも分かりやすくて。

緒方先生によれば、こうした検定試験に合格することが不登校経験者の「励み」になり、「検定試験で（資格を）取れると、だいたい休まなくなる」という。興味深いのは、不登校経験のある生徒の方がそうでない生徒より、取得する資格数が多い傾向にあるという点である。

緒方先生：不登校の子には入学の時にも、「今度は休まないように」「覚悟はしてください」って言います。で、素直にやり直しを図るぞと。そこで入って、商業系の資格の勉強は、中学ではワープロや簿記の勉強はやっていないですから、みんなゼロスタートで。それで、不登校の子の方が頑張ってくれます。どちらかと言うと、登校できていた子の方が、あんまりピンと来ない。中途半端ですね。

このように、郡山学院では単に知識・技能の習得のみならず、達成感を得て自信を培うきっかけとして資格取得を位置づけている。不登校経験者の中には学力面の問題を抱えている生徒も少なくないが、この点でも郡山学院は「検定に受かるため」の勉強に注力し、いわゆる学力以上に、「生きる力」「就職する力」に重きを置いているという。

緒方先生：数学ができない子はいますけれど、だいたいの検定試験は簿記も含めて、電卓を使ってよいので、あとは、検定試験に合格させる教員側のスキルだと思います。私も簿記を教えているんですけど、「簿記そのものは素人だから」と断って、「検定に受かるための簿記だから」ということで、過去問を分析したりとか、とにかく効率よく、生徒が分かるように、テクニックを教えています。

他にも、郡山学院に特徴的な取り組みとして、学校行事に献血が組み込まれていたり、校舎近隣の清掃をボランティアで行ったりしていることが挙げられる。いずれも地域社会への貢献を目的としており、生徒たちは様々な人から「助かりました」と声を掛けられることで、やはり自信を培うことができるという。

同時に、郡山学院ではビジネスマナーに関する指導も積極的に行われている。例えば緒方先生は、国語の授業の中で「新入社員の心構え」や挨拶の仕方等について教えている。

緒方先生：3年生に対しては、国語の授業で新入社員の心構えとか、20代で身につけるべきことっていうのを説明しています。自己啓発の本が色々出ているので、役に立つ部分を抜粋して説明したり。やっぱり挨拶も、ただ単に相手の顔も見ずに「おはようござ

います」とか、感じの悪い挨拶になったらしょうがないので、「あなたのことを大事に思っています」という意思表示として、明るく元気にするのが大事だぞっていう話をしています。あと、「ありがとうございます」という感謝の言葉は言えるんですけど、謝罪ができない。「ご迷惑をお掛けしました、これから注意します」ということが、意外に言えない子が多いんですよ。ですからそういう話をして、一緒にやってみたり。

段階的に「ギアを上げる」

一方、キャリア教育に関して大橋先生が強調したのは、将来的自立に向けて段階的に指導をしていくという点である。すなわち、1年生は「ほとんどお客様扱い」であり、学校生活への定着のために「友だちを作ること」や「自信を持つこと」が重視されるが、学年が上がるにつれ、社会人としての態度や姿勢について時には厳しさも伴った指導が行われる。

大橋先生：これは担任中心に言っていることですけど、学年が上がったら、我々の指導もちょっとギアを上げてください、と。生徒を注意するにしても、「同じことを職場でしたら、どうなると思う」という話をするようにしています。「職場でこういうことをしてしまったら、どうなる」という。謝罪の話もそうですけど、黙ってしまって謝れない子はいます。でも職場で、例えばオフィスで、自分が注意をされた時に謝らなかったら、周りの空気も悪くするんだよって。自分が休んだら、他の人がそれをフォローしなくちゃいけない。一人のせいで、会社全体に迷惑が掛かることもある。そういう責任があるんだぞ、覚悟してというような。

こうした将来の職業的自立を意識した指導は、プリントの提出等、細かな面にも及ぶ。例えば、字が拙い時や誤字がある時には、「これを職場で上司に出せるのかい」といった注意も為されるという。

進路面接対策研修

また、特に就職に関連したカリキュラムとしては、2年次に行われるインターンシップや「進路面接対策研修（面接研修）」が挙げられる。インターンシップは就職希望の生徒を対象に、3、4社にて実施される。また、面接研修は、2日間の日程で集中的に模擬面接指導をするものであり、2年生全員を対象として毎年10月に実施される。生徒は本番さながらの緊張感の中、個人・グループ双方の面接に挑戦し、入退室や受け応えのマナーを練習する。その際、声量を測定する機器が設置され、男子であれば80デジベル以上、女子であれば70デジベル以上の声量を出すことが求められる。生徒によってはハードルの高い研修であるが、大橋先生によれば、将来的自立に向けた大きな節目にもなるという。

大橋先生：就職だけじゃなくて、進学する子にとっても、2年生の面接研修、これが大きいと思います。大学や専門に行くことがゴールじゃないですから。その先で就職して、ちゃんと自立するんだよ、そのためにはコミュニケーション能力を身に付けないとダメなんだよ、ということで。不登校の子は苦手なところですが、けっこう厳しくやります。

尤も、中にはどうしても一定の音量を出せない生徒も認められ、そうした生徒には通常の模擬面接指導ではなく、別教室にて担任が個別で指導する体制が取られているという。

緒方先生：我々も、ちょっと厳しいかな、企業の方がむしろ優しいのかな、と思いつつも、ただ、やっぱり何のために教育をしているのかと言うと、ここでちゃんと注意しなかったり、ここで叱ってあげないと、この子のためにならないかなっていう感覚はありますね。自分が、生徒を甘やかして、自分が好かれたいっていう考え方は、間違っていると思います。この前も2年生の子で、恋愛関係とかで悩んで、体調悪いってことで授業に出られなかったりすると、ピシッと云いますね。授業が一番大事なんだから、体調管理しっかりしなって、しっかりやろうって。

進路内定率はゴールではない

以上のように、郡山学院では資格取得を軸として不登校経験者の“変身”が促されると共に、面接研修に代表されるように、将来的自立を見据えた「厳しい」指導も行われていた。インタビュー終盤にて、大橋先生はそうした指導の背後にある「学校のミッション」に言及した。

大橋先生：今は通信制も増えていて、そちらでも進学・就職はできるかと思うんですよ。ただ通信制だと、服装も髪も自由ですし、月に何回か行けばいいとか、それだとフルタイムで就職してから、難しいですよ。就職してもすぐ辞めるようでは、本人も会社さんも不幸になりますし。できるだけそこで継続的に勤務できるように、全日制にして、他の高校と同じような校則もあって。なのでうちは、進路内定率は100%ですが、学校のミッションとしては、それがゴールではないんですよ。やっぱり将来、職業的に自立できるということ、自分で食べて行けるように育てることが、我々の使命ですから。

4. 考察

前節では、3つの高等専修学校を先駆事例とし、インタビュー調査の結果を整理した。本節では、その結果を踏まえ、不登校経験者へのキャリア教育の在り方を検討する。

最初に確認したいのは、3つの高等専修学校がいずれも非常に個性的なカリキュラムを

展開しているという前提的な事実である。これは、それぞれの学校がその来歴や地域性に根差しつつ、学習指導要領に囚われない柔軟な教育課程を築いてきたことを意味する。豊野であれば、ソーシャルスキルやコミュニケーションスキルに関する独自の授業があり、ロードマップや進路指導の手引きといった独自の教材がある。東朋であれば、オリジナリティに富んだ多彩な選択授業があり、教科によっては生徒と教員で授業内容を組み立てることもできる。郡山学院であれば、資格取得に特化した授業展開により、在学中に合格証書を十枚近くも得ることができる、というように、いずれの学校にも他に類を見ない教育実践が認められる。今回の調査において、インタビューイーの言葉の片々に筆者が感じたのは、このカリキュラムの独創性と、それを担う教職員の使命感や自負であった。その背景には、管理職を中心としたカリキュラム・マネジメントの着実な遂行があると考えられるが、ある意味で、学校が学校として独自のキャリアを発達させ、生徒の自立に先んじて学校組織のアイデンティティの確立が成し遂げられているようにも感じられた。

また、井上先生や大橋先生から語られた、不登校経験者が全日制に通うこと自体の意義についても考察を加えておく。森田（2003）は不登校経験者の進路に関する追跡調査から、「人とのつながりや職場や学校という場へといったんつながりをもてば、その人は、その後の生活でも社会との接点を保ち、社会的な場での自分なりの位置を持ち続けていく方向へと向かう“正の連鎖”の確立が極めて大きい」と結論付けている。毎日登校してクラスメイトと授業を受けることが、その後の実社会での適応に繋がるという本調査での語りは、こうした知見と符合するものである。とりわけ、不登校経験者も「心のどこかで」中学校でできなかった集団生活を望んでいたり、「意外に」人前で発表する経験を求めていたりする、との井上先生や菱沼先生の語りには、不登校経験者のニーズが示唆されており興味深い。つまり、インタビューイーは単に訓練的な必要性から全日制を勧めているというより、不登校経験者自身が「本当は普通に学校に通いたい」「本当は普通に高校生活を送りたい」と願っていることに応え、その潜在的なニーズが上手く育つように「背中を押し」ているのである。この微妙なニュアンスの差異は、実際の生徒対応場面における声掛けのタイミングや言葉選びといった举措の一つ一つに反映されるように思われる。

次に、3つの学校に共通する特徴として、「出会い」や「人間関係」の経験に重きが置かれているという点に着目したい。例えば豊野では、学外から様々な講師を招いたり、インターンシップを充実させたりし、生徒を実社会に積極的に触れさせていた。東朋では、選択授業等を通して縦割りのクラス編成をし、どの生徒もホームルーム以外に複数の集団に所属する形態が取られていた。郡山学院では、インクルーシブな教育環境を作り、特別支援級の出身者や不登校経験者が同じクラスでピアサポート的な関係性を築けるよう配慮が為されていた。キャリア教育の指標とされている基礎的・汎用的能力の筆頭にも「人間関係形成・社会形成能力」が掲げられているが、在学中に多様な対人関係を体験させる具体的な工夫が、ここに見受けられる。

また、生徒の自信・自己肯定感を育むカリキュラム上の仕掛けが豊富であるという点も、3つの学校の共通項と言える。不登校経験者の自己肯定感が低い傾向にあるということは、先行研究でも夙に指摘されてきたことであり（朝重・小椋，2001），それは進路選択にも少なからず影響を及ぼすと考えられる。例えば松井・笠井（2012）は、不登校経験者へのインタビュー調査を通して、「（不登校経験者は）将来を決めるということに大変さを感じてはいても、将来の自分を見据えて努力をするという方向ではなく、現状の自信のなさに起因するかたちで、より消極的な選択をしてきている様子が伺える」と論じている。ここにおいて、自信・自己肯定感の回復は不登校経験者へのキャリア教育の不可欠な要素となるように思われるが、今回のインタビュー調査にて語られたのはカリキュラムないし授業を通していかに生徒を勇気づけるかという組織的支援の様々なバリエーションであった。具体的には、豊野では自分の成長を視覚的に迎える教材が用いられていたり、自分の長所を認識できるようリフレーミングに繰り返し取り組んだりしていた。東朋では、勉強に関して「できる感覚」を養えるようレポート・考査を独自に作成し、「勉強以外」でも生徒が力を発揮できるような授業が設けられていた。郡山学院では、検定試験対策に重きが置かれ、合格発表や表彰の仕方にも様々な工夫が凝らされていた。さらに言えば、3つの学校とも不登校経験者が多く集まっているため、生徒は不必要に気後れすることなく勉強の苦手さやコミュニケーションの拙さといったネガティブな面も含め、互いに認め合っている雰囲気が感じ取られた。伊藤（2017）は「不登校経験をもつ生徒たちにとって、生徒間関係が学校に『通えない理由』ではなく『通えている理由』になる背景の一つとして、生徒集団が過去の学校体験における心の『痛み』や『傷』を共有しているということを押さえておく必要がある」と述べているが、学力不振や不登校による自信喪失＝「痛み」の共有こそ自信回復への礎となるのかもしれない。

尚、自信・自己肯定感の回復にはボランティア活動等による他者への貢献も重要な因子となる。アドラー心理学を持ち出すまでもなく、誰かの役に立っている・必要とされているという感覚はその生徒の共同体への所属感を高め、さらなる協力・協働への動機づけともなると考えられるからである。地域の清掃活動や献血といったボランティア活動も、その限りでキャリア教育の一環と捉えられる。「身内じゃない人たちからの称賛の声」が先生からの誉め言葉以上に生徒にとって重みを持つ、との菱沼先生の指摘を踏まえると、そうした活動の重要性は一層明らかであるように思われる。

しかし、ここで興味深いのは、単に成功体験の蓄積に留まらず、注意や指導を受ける経験（の方）が重要であるという語りが見受けられた点である。例えば東朋では、在学中にいかに多く「転ぶ」経験ができるかが重視されていた。また郡山学院では、面接練習等において厳しい指導が為されていた。これらの背景には当然ながら、卒業後の職場での定着が見据えられている。在学中に注意や指導を受ける経験がなければ、職場でそれらに直面した時に「もう立てない」と心折れてしまう可能性が高いからである。勿論、注意・指導

に当たっては、学年に応じて「ギアを上げる」といった配慮が重要であることは言を俟たない。とはいえ、学びの多様化の中でストレスの少ない学習環境も選択できるようになりつつある今日、注意や叱責を受ける経験、そしてそこから立ち上がるレジリエンスの養成が必要であるという語りには、警鐘とも言える響きが込められているように思われる。実際、鈴木（2019）は不登校経験者への就労支援に関して、その生徒の「叱責に代表される不条理を飲み込む力」を育むことが肝要であると指摘している。生徒の自信を育み、心理的なケアに努めることと、社会的自立を見据えてしっかり注意・指導を行うこととは両立が難しいようにも思われるが、不登校経験者へのキャリア教育において避けて通れない課題であろう。

一方、より具体的なキャリア教育の取り組みとしては、3校ともインターンシップ（職場体験）に重きを置いており、実施時期にもこだわりが見受けられた。すなわち、3年次では遅きに失するため、2年次もしくは1年次に早くもインターンシップが行われていた。また、豊野では生徒と職場の相互理解が重要との考えの下、教員が受け入れ先の企業に何度も足を運び、生徒の情報を共有するという地道な努力が為されていた。さらには公欠扱いにて、長期間の職場体験も認められるとのことであった。他方、公立の高等学校に目を向けると、在学中に1回でもインターンシップを体験したことのある生徒の割合は約15.6%に留まるという（国立教育政策研究所、2022）。この数値と比較しても、充実したインターンシップは高等専修学校という学校種ならではの強みであるように思われる。また児美川（2013）は、公立校でのインターンシップは「一過性のイベント」になっており、ここでの経験が必ずしも「気づき」に繋がらず、実際の就労に役立っていない可能性があることを指摘している。本研究で取り上げた3校の事例は、こうした従来のインターンシップの弱点を乗り越えるモデルとしても参照できるであろう。

加えて、キャリア教育の一環として生活スキルやコミュニケーションスキルに関する授業が展開されていることも、注目に値する。名刺の受け渡しや電話対応の仕方等の一般的なビジネスマナーのみならず、「箸の持ち方」を始めとする基礎的な生活力を身に付けさせるということは、従来のキャリア教育に関する文献ではほとんど取り上げられてこなかった。しかし、不登校経験者の中には、家庭の養育環境や保護者の養育能力に課題が認められるというケースも決して稀ではない。すると、不登校経験者の社会的自立を見据えた時、炊事や洗濯にまつわる生活上の「知恵」が場合によっては学力以上に重要な意味を帯びてくるようにも思われる。不登校経験者へのキャリア教育はキャリアプランを立てることよりも米の研ぎ方を練習することにあると言えば潤色が過ぎるであろうが、後期中等教育段階では通常そうした基礎的な生活力を学ぶ機会が設けられておらず、不登校経験者は義務教育段階でもその機会を逸していることが多い。その意味では、実社会に出る前の「最後の砦」である後期中等教育機関でこそ、抽象的な価値観や勤労観の形成以上に、基礎的な生活力の修得のチャンスこそ設けられていることが望ましいようにも思われる。

以上、本節ではインタビュー調査の結果に基づき、不登校経験者へのキャリア教育の在り方について考察してきた。3つの学校の取り組みは、いずれもカリキュラムを通じたものであり、いくつもの教科に横断的にキャリア発達の要素が散りばめられていた。これは、下村（2009）の言う「インフュージョン」、すなわち教科を始めとする教育活動全般にキャリア教育の要素を注入する手法であると捉えられる。勿論、中にはインターンシップのように進路決定に直結する活動もあるが、社会的自立という時に重視されたのは、教科や学年を問わず学校生活全体を通して育まれる自信や失敗の経験、そして様々な対人関係であった。その限りで、3つの学校のキャリア教育は担任や進路指導部のみならず、あらゆる教職員が参画して創り上げられたものであった。

不登校経験者へのキャリア教育の出発点にあるのは、こうした組織全体の連携であり、教職員同士の協働であると考えられる。生徒の人間関係形成能力を問う前段として、まず教職員がそれぞれの立場を尊重し、チームワークを発揮しなければならないとも言える。その意味で生徒のキャリア発達は、教職員との相互的コミュニケーションの中に存する同時並行的な過程なのかもしれない。

5. おわりに

田中（2022）が指摘するように、不登校経験者へのキャリア教育に関する研究は未だ黎明期にある。本研究の意義は、教職員の語りを糸口にその在り方を模索し、多くの実践的な示唆を得たことにある。後期中等教育段階で不登校経験者を積極的に受け入れている全日制の教育機関は数も少なく、さらにキャリア教育の充実化を組織的に図っている学校となると、全国的にも稀である。したがって、本研究で語られたインタビューイの臨床経験や実践事例は非常に貴重であると考えられる。

最後に、本研究の限界にも触れておきたい。本研究はあくまで教職員の語りに基づいたものであり、不登校経験者の体験に直接的に迫るものではない。また、本研究に限らず、不登校経験者の予後に関する追跡調査は未だ十分に行われておらず（浜内、2022）、キャリア教育の長期的な成果は必ずしも確認されていない。いわゆる定着支援等の卒業生へのフォローアップについても、今後の研究が待たれるところである。

不登校数が増加の一途をたどり、社会構造の流動化も一層進みつつある中、教育現場における不登校経験者へのキャリア教育の必要性はいよいよ高まっている。本研究で得られた知見が、そうした教育現場の実践に寄与するところがあれば幸いである。

〈付記〉

本研究のインタビュー調査にご協力頂きました高等専修学校の教職員の皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

〈参考文献〉

- 朝重 香織・小椋 たみ子 (2001). 不登校生の心理について—普通中学生との比較から
神戸大学発達科学部研究紀要, 8(2), 1-12.
- 中央教育審議会 (1999). 初等中等教育と高等教育との接続の改善について Retrieved
from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm (2024
年 5 月 28 日取得)
- 中央教育審議会 (2011). 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について
Retrieved from
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1315467.htm
(2024 年 5 月 28 日取得)
- キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議 (2004). キャリア教育の推進に
向けて～児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために Retrieved from
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/04111901.htm (2024 年 5 月 28 日
取得)
- 小宮 高弘 (2018). 不登校児童生徒へのキャリアガイダンス：相談場面でのアプローチ
指導と評価, 64, 18-20.
- 浜内 彩乃 (2023). 不登校経験者の社会的自立に関する一考察：不登校支援目標の変遷
および不登校研究の概観を通して 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要,
69, 27-34.
- 田中 典子 (2022). 不登校中学生へのキャリア支援の現状に関する研究 公共政策志林,
10, 169-184.
- 杉田 郁代 (2012). 不登校経験を持つ児童生徒へのソーシャルスキルトレーニングを用い
たキャリア支援プログラム：適応指導教室での実践 松田財団研究報告書, 24,
31-41.
- 五十嵐 哲也 (2011). 中学進学に伴う不登校傾向の変化と学校生活スキルとの関連 教育
心理学研究, 59, 64-76.
- 国立教育政策研究所 (2022). 令和 4 年度職場体験・インターンシップ実施状況等結果 (概
要) Retrieved from [https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/i-ship/r04i-
ship_1.pdf](https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/i-ship/r04i-ship_1.pdf) (2024 年 10 月 4 日取得)
- 児美川 孝一郎 (2013). キャリア教育のウソ ちくまプリマー新書
- 田山 淳 (2008). 中学生における登校行動とバウムテストの関連について 心身医学,
48, 1033-1041.
- 松井 美保・笠井 孝久 (2012). 不登校を経験した青年の育ちを抑制するもの—不登校経
験の意味づけと影響 千葉大学教育学部研究紀要, 60, 55-62.

- 松井 美保・笠井 孝久 (2013). 不登校経験者の不登校経験の意味づけとその影響—「問題」のとらえからみる支援のあり方 千葉大学教育学部研究紀要, 61, 77-86.
- 佐藤 友美・米光 真由美 (2018). 大学進学の原因が大学適応感とキャリア発達に及ぼす影響—不登校傾向の高い生徒の援助への提言 九州工業大学教養教育院紀要, 2, 17-27.
- 文部科学省 (2023). 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果及びこれを踏まえた緊急対策等について Retrieved from https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422178_00004.htm (2024年5月28日取得)
- 伊藤 秀樹 (2017). 高等専修学校における適応と進路 後期中等教育のセーフティネット 東信堂
- 瀧本 知加 (2022). 専門学校における職業教育とキャリア教育：コンピテンシー・ベースドの職業教育の観点から 福祉社会研究, 22, 33-47.
- 二宮 祐子 (2010). 教育実践へのナラティブ・アプローチ—克蘭ディニンらの「ナラティブ探究」を手がかりとして 学校教育学研究論集, 22, 37-52.
- 文部科学省 (2018). 未来をひらく高等専修学校 Retrieved from https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/senshuu/1413725.htm (2024年5月28日取得)
- 森谷 一経 (2023). 学校におけるキャリア教育と職業教育 中等教育から大学へ至るキャリア形成 第一公報社
- 大岡学園高等専修学校 (2023). 令和5年度「高等専修学校の実態に関するアンケート調査」報告書 学校法人大岡学園 大岡学園高等専修学校
- 下村 英雄 (2009). キャリア教育の心理学 大人は、子どもと若者に何を伝えたいのか 東海教育研究所
- 鈴木 慶太 (2019). 不登校と発達障害における就労へのアプローチ The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine, 56(6), 481-485.
- 東海林 麗香 (2018). 教師が学校行事で経験する個と集団のジレンマ：小中学校教師のナラティブと教師文化に焦点を当てて 山梨大学教育学部紀要, 29, 127-137.
- 山田 千春 (2022). 高等専修学校の研究 地域の教育ニーズに着目して 六花出版

共同研究

(代表者) 横山 優樹

浦野香奈子